

シンチは同部位の集積亢進を示した。また、骨シンチ上、肋骨に淡い集積と胸骨、胸椎、大腿骨に欠損像を呈した 1 例において $^{99m}\text{Tc-HM-PAO}$ は全部位に異常集積を示した。また、骨シンチグラフィ上、肋骨、骨盤、大腿骨に欠損を呈した 3 例においても $^{99m}\text{Tc-HM-PAO}$ は集積亢進を呈した。肝細胞癌の骨転移では骨シンチグラフィ上の cold lesion にも注意を払い、また $^{99m}\text{Tc-HM-PAO}$ シンチグラフィの併用も有用であることが示唆された。

4. 骨軟骨腫瘍の骨シンチグラフィの特徴的所見の検討

米城 秀 菅 一能 藤田 岳史
河田 陽子 有田 剛 中西 敬
(山口大・放)
宇津見博基 山田 典将 (同・放部)
横山 敬 (国立湯田温泉病院・放)

原発性骨軟骨腫瘍 23 例に対し、 $^{99m}\text{Tc-HMDP}$ シンチグラフィを行い、特徴的所見の有無について検討した。集積度については、悪性度の高いものに集積が強く見られたが、悪性でも集積の見られないものがあり(多発性骨髄腫、脊索腫)、良性でも集積のあるものも多く、良悪の鑑別は困難であると考えられた。リング状集積は、骨肉腫 8 例中 6 例、内軟骨腫 2 例中 1 例、巨細胞腫 1 例中 1 例に見られた。Extended-pattern は骨肉腫のみで見られた。

5. 骨転移放射線治療前後の骨シンチグラム所見の検討

木内 孝明 三谷 昌弘 細川 敦之
川崎 幸子 佐藤 功 高島 均
田邊 正忠 (香川医大・放)

過去 4 年間の骨転移放射線治療施行 64 例のうち骨シンチグラムで経過観察された 18 例 32 部位の骨シンチグラムと、単純 X 線写真の経時的変化を除痛効果の有無により分類し検討した。除痛効果のみられた有効 14 症例、26 部位のうち、flare phenomenon が 42% に見られた。集積減少は 4~6 か月後が最も多く 70% であった。単純 X 線写真では、溶骨像から硬化像に変化したものが 29% であり、放治前に硬化像や正常の場合には、X 線写真上変化がみられなかった。痛みが増強した無効例は 4 症例 6 部位と少ないが、骨シンチグラムでは集積は増

強し、単純 X 線写真では溶骨性変化が進行する傾向がみられた。

6. 転移性椎体腫瘍の MRI と骨シンチグラフィ

——組織所見との対比——

吉廻 毅 内田 伸恵 梶谷 明子
杉村 和朗 石田 哲哉 (島根医大・放)

生検または剖検によって組織学的に確認された腫瘍形成型の転移 3 症例 18 椎体と、びまん型の転移 3 症例 22 椎体の MRI と骨シンチグラフィの病巣検出能を比較した。MRI の病巣検出率はいずれの pulse sequence においても 100% であった。骨シンチの検出率は両型とも有意に低く、特にびまん型転移では 18% と極端であった。これは骨シンチが骨代謝の亢進を反映するためかもしれない。一方、MRI は骨成分の変化は描出できないが、腫瘍細胞の増殖による骨髄の変化を画像上信号の変化として示す。したがって、骨皮質に変化をきたさない、骨髄へのびまん性転移が疑われる場合には、骨シンチに MRI を併用することが必要である。

7. $^{123}\text{I-IMP}$ による肝細胞癌骨転移巣の検出能の検討

岩宮 孝司 谷川 昇 周藤 裕治
遠藤 健一 西尾 剛 水川帰一郎
澤田 敏 太田 吉雄 (鳥取大・放)
謝花 正信 (松江市立病院・放)

転移巣を有する肝細胞癌症例に対して $^{123}\text{I-IMP}$ シンチグラフィを行い、転移巣の検出能に関して検討を行った。対象は骨転移 3 例、脳転移 1 例、肺転移 3 例、副腎転移 1 例、縦隔リンパ節転移 1 例である。方法は $^{123}\text{I-IMP}$ 111 MBq 静注 3 時間後、臥位にてスポット撮影を行った。なお、脳転移例では静注 30 分後より SPECT による撮像を行った。骨転移の検出は良好で、骨外進展の把握にも有用であった。副腎転移、縦隔リンパ節転移にも集積を認めたが SPECT が望ましいと考えられた。肺転移には集積を認めず、撮像時間の検討が必要と考えられた。